

茶病虫害防除情報

令和3年5月7日

【第8号】

鹿児島県経済連・肥料農薬課

夏茶の品質向上・安定生産のための

二番茶芽生育期の病虫害防除対策

奄美地方で梅雨入りが発表され、新緑輝く初夏らしい気候になりました。一番茶の生産は遅場産地でも終盤を迎え、早場産地では二番茶芽の萌芽生育期も近まりました。今回は夏茶の品質や収量に影響する二番茶芽生育期の病虫害防除対策についてお知らせします。

☆ 病虫害の発生概要

◎ 炭疽病・・・「やや少」 黒葉腐病・・・「注意」

昨年秋芽生育期発病の越冬病葉は多いでしたが、一番茶芽生育期は比較的に晴天が多く、降雨日が少なかったため伝染源として活力の高い摘採残葉の新発病葉数は少ない状態です。しかし、二番茶芽の生育期は梅雨入りも予想されますので、感染の機会が多くなり、一般に発生は多くなります。黒葉腐病も降雨が続くと、発生の恐れがあり、注意が必要です。

◎ チャノトリヒメコハイ・・・「やや多」 チャノキアザミマ・・・「少」

これから発生が多くなる時期になります。一番茶期までの発生はやや少なかったですが、その後乾燥した晴天気象のため両害虫ともやや増加しています。梅雨入りが遅れ、晴天傾向の天气が続くと多発生し、二番茶芽に被害が出る恐れもあります。

◎ チャノホカ・・・「発生時期早い」 「発生量多」

二番茶以降に発生が多くなり、一昨年は南薩地域で水赤を生じる被害がでました。一番茶残葉の三角巻葉発生状況は多い状況です。二番茶芽萌芽～1葉期頃に産卵、葉潜り状況を観察し発生を判断します。発生時期と新芽生育期が合う園や品種で発生が多くなります。

☆ 基本的防除対策

この時期は品種、芽の生育状態、病虫害の発生状況に対応した防除をします。いずれの病虫害も萌芽～1葉期頃が散布適期です。「やぶきた」園などは混用散布により病害も同時防除します。また、この時期は萌芽から摘採までの期間が短く、気温の上昇で芽の生育が早まることがあるので使用基準の摘採7～10日前に使用できる薬剤を選択し、散布します。

また、最近、一部薬剤では薬剤耐性菌や害虫の感受性低下が地域によって生じていますので、地域の栽培暦に採用されている薬剤で防除します。

◎ 炭疽病 黒葉腐病・・・降雨が多いときは注意 降雨前の予防防除が基本

炭疽病は「やぶきた」園などでは梅雨入りで発生が多くなりますので防除が必要です。摘採残葉として残る下位1～2葉を守るよう萌芽～1葉期の降雨前にダコニール1000での予防防除が基本です。特に伝染源病葉が多く、雨天後散布になるような場合や摘採を遅らせるドリノク茶栽培園ではダコニール1000とインダゴアブルを低濃度で混用散布すると効果的に防除できます。黒葉腐病は樹勢が良く、芽の詰った園や「ゆたかみどり」などの品種で、特に被覆園に発生しやすいので、萌芽期～1葉期頃にダコニール1000を予防散布しておきます。

◎ **チャノミト[®]リヒメコハイ** **チャノキイアサ[®]ミウマ**……雨が少ないと多くなる

梅雨入りが遅れ、天気が続くと多くなります。芽の生育初期に加害を受けると被害が大きくなるので萌芽期頃の防除が最適です。チャノホカ[®]、炭疽病などと同時防除する場合は萌芽～1葉期に防除するとよいでしょう。ネココノイト[®]系薬剤など一部薬剤で感受性が低下していますのでウラ[®] DF など地区栽培暦採用薬剤で防除します。

◎ **チャノホカ[®]**……品質への影響大

1葉期頃に産卵・幼虫の葉潜り状況をみて防除を判断します。多くみられる園では1葉期頃に防除します。2～3葉期以降に産卵がみられ、10日以内に摘採予定の園では被害は回避できますので防除の必要はありません。これまで使用されてきた IGR 系チン合成・脱皮阻害剤（ノモルト、カスケド[®]）、ジアミト[®]系薬剤（サムコル、エクシレル、フェニックス）で感受性が低下している地域では IGR 系脱皮促進剤のファルコンフロアブル[®]など地域の栽培暦採用薬剤で防除します。

☆ **二番茶芽生育期の病害虫防除法**

太字は地区茶栽培暦採用薬剤

病害虫名	薬剤名	希釈倍数(倍)	使用時期・回数	使用上の留意事項
炭疽病 (黒葉腐病)	ダ [®] エール 1000	700～1000	10日前 1回	萌芽～1葉期の降雨前に散布する 輸出茶・有機栽培園に使用する 混用散布は降雨持続後の応急対策
	ク [®] ロシール [®]	500	3日前 ー	
	ダ [®] エール 1000+インターフロアブル [®]	1000+8000	10日前 1回	
チャノキイアサ [®] ミウマ チャノミト [®] リヒメコハイ	ウ [®] ラ DF	1000～2000	7日前 1回	薬剤抵抗性を考慮し、同一系統薬剤使用は年1回とする
	スタークル顆粒水溶剤	2000	7日前 2回	
	コルト顆粒水和剤	2000～3000	7日前 2回	
チャノホカ [®] (サンカクハマキ)	サムコルフロアブル 10	2000～4000	3日前 1回	1葉期頃が散布適期である 葉裏への産卵・幼虫の葉潜り状況を確認し、防除する
	ファルコンフロアブル	4000～8000	7日前 2回	
	カスケド [®] 乳剤	4000	7日前 2回	
	ノモルト乳剤	2000～4000	7日前 1回	
チャノキイアサ [®] ミウマ チャノミト [®] リヒメコハイ チャノホカ [®] 同時防除	ウ [®] ラ DF+サムコルフロアブル	1000+4000	7日前 1回	下記の3種混用散布は可能である ダ [®] エール+ウ [®] ラ+サムコル ダ [®] エール+コルト+サムコル ダ [®] エール+ウ [®] ラ+ノモルト ダ [®] エール+ウ [®] ラ+カスケド [®] ダ [®] エール+コルト+ノモルト
	ウ [®] ラ DF+ノモルト乳剤	1000+4000	7日前 1回	
	ウ [®] ラ DF+ファルコンフロアブル	1000+8000	7日前 1回	
	ウ [®] ラ DF+カスケド [®] 乳剤	1000+4000	7日前 1回	
	コルト顆粒水和剤+サムコルフロアブル	2000+4000	7日前 1回	
コルト顆粒水和剤+ノモルト乳剤	2000+4000	7日前 1回		
炭疽病 有機栽培園	ク [®] ロシール [®]	500	3日前 ー	降雨の多い時は2回散布する
	Zホルト [®] ー	400	7日前 ー	
ト [®] リンク茶栽培	ダ [®] エール 1000+インターフロアブル [®]	1000+8000	10日前 1回	混用散布・2葉期頃に散布する
チャノホカ [®] 有機栽培園	エスマルク DF (BT 剤)	1000	7日前 ー	葉縁巻葉期に散布する 三角巻葉 減少効果は低いが虫糞を抑制する 卵・葉潜り期散布の効果は低い
	レビ [®] クリーン DF (BT 剤)	500～1000	前日 ー	
	サブ [®] リナフロアブル (BT 剤)	1000	7日前 ー	

二番茶期に発生する病害虫



チャノミドリヒメコバエ被害芽



チャノキロアザミウマ被害葉



チャノホリガ三角巻葉
(巻葉内の虫糞により品質(水色)悪化)



チャノホリガ卵 チャノホリガ潜葉幼虫
(卵～潜葉幼虫期の薬剤防除効果高い)



摘採残葉に多発生した炭疽病

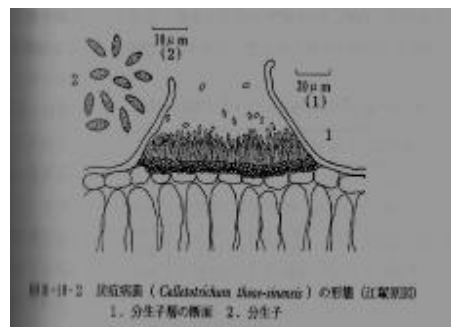


図8-11-2 炭疽病菌 (*Gallotrichum rose-avenae*) の形態 (江坂重昭)
1. 分生子層の構造 2. 分生子

炭疽病菌の分生子形成図と分生子